どこでも博物館

水面の下のワンダーランド

主任学芸員（魚類生態学）
中井克樹

目の前に水面が広がると、ついその中に顔を突っ込みたくなる私。必需品の水中メガネ（最近はデジカメ水中用パック等でも代用可）を通して広がる水中世界に胸が躍ります。

湖に潜り始めたのは20年以上前、「世界の湖の魚たち」の展示水槽があるアフリカのタンガニイカ湖でした。そこで魚の子育て（館内でも観察可能）を調べた後、日本でのフィールドに選んだのが琵琶湖でした。

対象の魚はオオクチバスとブルーギル。興味深い行動を見せてくれると同時に、琵琶湖では問題を起こしている外来魚でもありました。素朴な好奇心から潜っていたつもりが、いつしか有効な駆除への

の応用ばかりを考えている自分がいます。甲斐甲斐しく子育てする姿に感動し、なるだけ「魚の気持ち」になりながら、それを逆手にとって相手を追い詰めようとしていることに、心が痛みます。

それでも、私にとって水面下の世界は、多種多様な動植物が生きている姿を目の当たりにできる博物館。次々と不思議に出会えるので、齢が気になりだしても止められません。

釣りを楽しむ人たち、魚つかみをする子供たち、そして本職の漁師さん……みなさん知識や経験が豊かな、魚たちと接する技自慢です。でも、せっかくの「お魚好き」ですから、水の中を直接のぞいてみませんか？　きっと魚たちの新たな魅力を発見できますよ。

わたしも博物館人

「びわたん」を楽しんで

はしかけ［びわたんグループ］　佐々木ファミリー（信幸・則子・満保・幹朗）

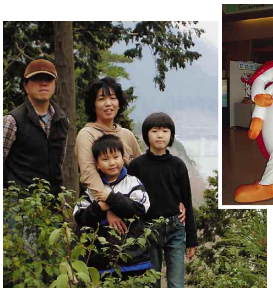
みなさんは「びわたん」をご存じですか？

「琵琶湖博物館わくわく探検隊」で、体験学習プログラムを通して子どもたちに、博物館の楽しさや学びへのきっかけ作りを提供しています。季節ごとの素材などを通して、自然の不思議を感じたり、伝統に触れたりすることを体験します。

私たち家族も最初は一参加者でした。毎回、我が子の驚きや発見と笑顔につられて参加するうちに、気がつくと輪の中に入ってお手伝いしていました。

スタッフの側になっての驚きは、プログラム開発でのスタッフ一人ひとりの意識の高さと、「自分たちが楽しまなければ、楽しいプログラムができるわけがない」というスタンスでした。我が子（小6と小4）はいつもそばにいるお姉さんたちの、プログラムを作る真剣な姿を間近に見ることで、自分たちも役立ちたいと思うようになってきたようです。子どもたちの成長を感じながら、「びわたん」を楽しんでいます。

1月は博物館を大きな盤面に仕立てた大スゴロク大会です。ゲームやクイズを通して、日頃気づかないような展示の紹介をします。私たち家族もお手伝いしています。一度会いに来てください。



交流ノート

こんにちは！ 展示交流員です。

私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。

今回は、C展示室で行われた「交流員と話そう」の取材です。来館者の方とどんな交流があったのでしょうか。

「オサムシの紙フィギュアをたのしもう」（北田交流員）

▶このテーマを選んだ理由は？

▶オサムシが好きだったからです。また、企画展「歩く宝石オサムシ」もありましたので、タイムリーだと思ったからです。

▶来館者の反応はどうですか？

▶参加していただいた方の中には、30分から40分ぐらいの長時間おられる方もいらっしゃいました。

長い間おられるのはいいことなのですが、時間がかかりすぎともいえますので、次回は短時間で仕上がるように改良したいと思っています。

オサムシの紙フィギア作りを楽しむ子どもたち

▶印象に残ったことは何ですか？

▶マイマイカブリが好きで、いろんなことを知っている子が意外に多くいて、少し驚きました。

「琵琶湖の冬鳥を見ませんか」（林交流員）

▶このテーマを選んだ理由は？

▶冬になると琵琶湖に水鳥がいっぱい来るので、それをお客さんに楽しんでもらいたいと思ったからです。お客さんといっしょに望遠鏡で水鳥を見ながら交流しています。

▶来館者の反応はどうですか？

▶まず、琵琶湖に水鳥がたくさんいることにびっくりされます。特に、カワウはねぐらがあって羽を乾かしている姿をよく見かけることができます。テレビのニュースにもたびたび出てくるせいかカワウを見たお客さんは「ほう！　あれがカワウか」と驚かれることがあります。

望遠鏡で水鳥をのぞきながら交流